

△研究ノート▽

文学のなりたち (二)

坂野信彦

第二章 言語活動の性格

1 言語の組成

本章では、言語および言語活動について、その基本的な原理と性格を考えてみる。むろんここでは理解の対象は文学の考察に必要なことがらにかぎられる。

まず基本的な事項の確認からはじめよう。言語を習得し駆使する能力は人類に共通の生得的なものであるが、個々の言語それじたいは社会的な慣習である。すなわち言語は、特定の言語共同体に共有される約束ごとである。言語は、記号の体系をもち、その用法についての法則（文法）をもっている。意義をもつ最小の単位である「言語記号」は、意義を指定する面（能記）と指定される意義の面（所記）とが、つまり形式的側面と内容的側面とが、結びついたものである。本稿では前者を「記号形式」、後者を「記号内容」とよぶことにする。

記号形式と記号内容とは、言語共同体の協約によってのみ、たがいに呼応しあう可逆的な対応関係をもつ。記号形式も記号内容も抽象的である。高度に抽象的であるがゆえに、それらは高い一般性をもつ。記号の両面は、つねに記号の体系に依存しており、個々の記号は記号の系列における相互関係によって特徴づけられる。

△山▽という意義に対応する「ヤマ」という記号形式（「ヤ」および「マ」という、ふたつの音韻からなる）は、さまざまな音声で発声される「やま」という発音を、他の発音と区別されるように特徴づける、その諸条件である。副次的な記号形式としての「山」という漢字（文字形式）もまた、さまざまな字形で書かれる「山」という文字を形成するための諸条件である。いっぽう、記号形式「ヤマ」に対応する記号内容である△山▽という意義は、あらゆる山に共通する本質的な特性、すなわち山がほかならぬ山であるための条件の束である。

言語記号が一定の順序にならべられることによって、句や文や文章などの言語表現が構成される。文の構成における記号のなればかたや活用の方式が、文法という約束ごとである。文法とは、記号のなればかたや活用のしかたについて、条件の体系である。

文法にのっとって構成された文や文章が、単語のよせあつめ以上のものであることはいうまでもない。が、抽象的な記号がどれだけならべられようと、記号の抽象性が解消されることはない。抽象的なもの同士の間から生じるものも、やはり抽象的ではない。抽象的な条件の束をどれだけふやしても、その抽象性が具体性に転化することはないのである。文や文章は、言語の次元では、あくまで抽象的なものとどまる。

言語活動は、このような抽象的な言語表現を媒介としておこなわれる。言語活動の本質的形態であるコミュニケーションが、言語表現を媒介としてどのようにおこなわれるかを、以下に考えてみよう。

2 言語表現の本性

言語による情報の伝達には、表現と理解というふたつの活動過程がふくまれる。表現および理解の活動はすべて、主体の頭のなかでおこなわれる。主体の頭のなかには、さまざまな知識、情報がつめこまれている。言語表現は、つねにそうした主体の頭のなかで構成され、また受容される。

言語による情報の伝達において、送り手は言語表現によって、受け手の知らないことがらを知らせたり、受け手の意識していないことがらを意識させたりする。言語によるコミュニケーションは、当事者同士が共通にもっている認識を基盤として、共通にもっていない認識を到達しあうところに、なりたつ。送り手は受け手がもちあわせていないと考えられる認識を、言語表現によって埋め合わせようとする。言語表現は、その本質において、欠如した情報の補足という役割をになうわけである。

言語表現が情報の補足を第一義とするものならば、その機能は主として不足している情報の補足にかかわることになる。逆にいえば、不足していない情報は、言語表現のうえにあらわれてはこないということである。

駅の切符売場の窓口で乗車券を買う場面を想定してみよう。もし乗車料金が百円均一であるならば、黙って百円玉を差し出すだけでことたりるだろう。具体的な行為だけですべての情報が充足してしまいうから、ことさら言語的手段に依存する必要がないわけである。乗車料金が行き先によってちがうばあいには、行き先の駅名を告げなければならなくなる。すなわち、料金を差し出しながら、ひとこと、

——新宿。

とえばよい。その場面で欠如していた情報は、ただ行き先の駅名だけであったのだから。この場合の「新宿」とい

う一語は、情報の欠如を完璧に埋めるものであって、それだけで言語表現として完全なものである。伝達という表現の機能からいって、「新宿」という発話には、いかなる語句も省略されてはいない。

もちろん私たちは、欠如した情報のみをぶっきらぼうに投げつけるような発話ばかりしているわけではない。言語は、それしたいが文化であり慣わしである。服装とおなじく、機能性だけでなりたつものではない。背広姿にワイシャツ、ネクタイ、革靴がつきものであるように、一定の形式的なしきたりが言語表現を支配している。しきたりにのっとって形式をととのえるために、情報の補足に直接関係のない語句を、私たちはつねに言ったり書いたりしている。その形式的なしきたりは、文法上の規約にまでおよんでいるばあいもあるし、風紀上の規約にとどまっているばあいもある。いずれにせよ私たちは、情報の不足を補うための語句に、かたちをととのえるための語句を加えて、言語表現を構成し発話するわけである。

文法学者の多くは、形式的なしきたりにのっとった“正式な”発話ばかりを基準にして、言語表現を観察する。そこで、日常の会話などは、あたかも省略ばかりでなりたっているかのように考えざるをえなくなる。しかし言語活動の本質であるコミュニケーションの観点から言語表現をみるならば、様相は一変する。情報の伝達にとっては、形式的なしきたりなどは副次的なものでしかない。そこでは、“正式な”かたちでないことが、省略をかならずしも意味しないのである。

ここで、ひところ盛んに文法論議のネタになった“ウナギ文”をとりあげてみよう。

A氏とB氏が料理屋に入って席につくと、給仕人がやってくる。A氏がB氏にむかって言う。

——ぼくはウナギだ。

B氏がそれに応じて言う。

——ぼくもだ。

A氏は給仕人にこう告げる。

——ウナ重ふたつ。

きわめてありふれた日常の会話である。A氏がはじめに言った「ぼくはウナギだ。」が、問題の「ウナギ文」である。この文の組成をめぐって諸説紛紛とした。そのほとんどは、「注文」などの表現を省略したものとみたり、「ウナギだ」の「だ」が「……を食べる」といった述語を代用するとみたりするものであった。「背広にネクタイ」式の観点からは、そのように解釈せざるをえないであろう。けれども言語表現の機能の面からみると、ここには何の省略も代行もないといえる。なぜなら、「注文」とか「食べる」などということとは、発言のうえでははじめから問題にならないからである。

右の場面で欠如していた情報は、「誰」が「何」を食べるかということだけである。したがって、欠如していた情報は、二語からなる次のような発言によって完全に満たされる。

——ぼく、ウナギ。

この「ぼく、ウナギ。」という表現は、「ぼくはウナギを注文する(食べる)」といった意義をもつものではない。

「ぼく、ウナギ。」は、まさに「ぼく・ウナギ」というそれだけの意義をもつ。欠如した情報を過不足なく補足する、これはもっとも簡潔な表現といえる。もっとも、「ぼく、ウナギ。」は、おとなの発言としては、いくぶん舌たらずな、こどもじみた表現と感ぜられよう。けれどもそれは、主として風紀上のしきたりによるものであって、言語表現としての不備によるものではない。「ぼく、ウナギ。」という表現には、いかなる省略もない。

「ぼく、ウナギ。」に省略がなければ、それに助辞を加えた「ぼくはウナギだ。」にも省略はない。「ぼく」に主格

を指定する助辞をそえると、「ぼくはウナギ。」となる。さらにそれに句文の断定的終結を示す助辞をそえると、「ぼくはウナギだ。」となる。情報を補足する語句に形式的な助辞をそえることによって、風俗上の体裁をととのえるときにも、情報の受けとりかたをいっそう明確にしたわけである。「ぼくはウナギだ。」は、だからむしろ冗長性をもたせた表現なのであって、簡略化した表現ではない。

B氏の「ぼくもだ。」もまた、省略表現とはいえない。A氏の「ぼくはウナギだ。」によって、A氏の注文がウナギであることがすでに意識されている。それゆえ、B氏もまたウナギを注文したいのだから、自分もそれと同じであるという意味のことを発言すればよいわけである。すなわち、「ぼくも。」といえばよい。これに句文の断定的終結を示す助辞をそえたものが、「ぼくもだ。」である。文字づらだけをみると、「ぼくもだ。」は「ぼくも(ウナギ)だ。」のカッコ内が省略されたもののようにみえるが、ほんらいは「ぼくも。」に「だ」が付加された表現なのである。

「ぼくはウナギだ。」にせよ「ぼくもだ。」にせよ、ひどく断片的な表現であるように思われよう。じっさい、それらはまさしく断片的なのである。そしてここで重要なことは、それらが表現として断片的でありながら、機能としては完全であるということである。この点に、言語表現の本質的な性格が端的にあらわれている。すなわち、言語表現は主体の認識のなかにあってはじめて意味(ここでは「意味」という語を、抽象的な「意義」と区別している)をもちうる、ということである。

ところで、言語表現が構成されたり受容されたりする場である「主体の認識」には、およそ人間のもちうるすべての感覚、知覚、感情、記憶、想像、思考、等々がふくまれる。それは、個人の心理的現象の総体というべきものである。その大部分は、意識下の産物であったり習慣化されていたりして、ふだんあまり意識されない。意識されているものは氷山の一角にすぎない。言語表現は、そのような主体の認識のなかで構成され、また受容される。ということ

は、言語活動は無意識の領域にふかく根ざしているということである。

「ウナギ文」がとくに断片的であるようにみえるのは、「注文」とか「食べる」といったことがらはっきりと意識されているからである。意識されていないことがらをも、ことさらはっきり意識してみるならば、断片的でないようにみえる文も、じつはやはり断片的であることがわかってくる。

——桜が咲きました。

これは、「文法」的にも意義のうえでも、「省略」のない完全な文といえる。けれども、いったいどの、どんな種類の、何本の桜であるのか、また、いつごろ、どのように、どれくらい咲いたのか、といった点については何も述べていない。つまり現象の要点だけを断片的に表現しているわけである。もしいま指摘した点をいちいち付け加えて表現したとしても、補足すべき事項はなおかぎりなく意識下の領域に潜在している。けっきょく、いかなる言語表現も断片的であることをまぬがれないわけである。

ここまでの叙述によって、つぎのことが確認された。——すべての言語表現は抽象的かつ断片的である。

3 理解と誤解

抽象的で断片的な言語表現は、主体の認識のなかにあってはじめて意味をもちうる。言語表現の受容は、表現のなかに認識を持ちこんで省略を補うことによってではなく、逆に主体の認識のなかに表現を持ちこんで吟味し意味づけることによって、遂行されるのである。意味づけの方向が主体の認識によって規制されるばかりでなく、意味そのものが主体の認識を材料として形成される。それゆえ、言語表現の意味は主体の認識によってつくられるといえる。

言語表現の意味の担い手である主体の認識は、とうぜんながら、言語による伝達を可能にも不可能にもする。意識

されたものであると否とにかかわらず、話し手と聞き手に共通した認識が、伝達を可能にする。料理屋の給仕人に「ウナ重ふたつ。」と告げるだけですべてが了解されるのは、客と給仕人の双方が、その場の状況について共通の認識をもちあわせているからである。だが、共通の認識をもちあわせるということは、じつはかならずしも容易なことではない。時枝誠記は、「言語は通じないものである」と極言した(『国語学原論続篇』)。そのひとは、共通の認識をもちあわせることの困難さについての、たしかな洞察に裏づけられている。

親しい者同士の日常の会話でも、しばしば意志の伝達がうまくゆかず、「え、どういうこと?」とか「それ、どういう意味?」と聞きかえしたりすることがよくある。そういうばあい「通じない」原因は、たいてい、言語の次元の不明にあるのではなく、当事者同士の意識のズレにある。主体の認識には、興味・関心、過去の経験、知識、価値観などといった臨時的、個性的性格の強い要素が参与している。それゆえ、主体の認識は、個人間においてけっして一致することはなく、同一個人にあってもつねに変化している。言語表現の意味は、そのような主体の認識によって決められる。認識の不一致は、おのずから意味の不一致を招来する。誤解、曲解、不可解が、そこに生じる。

伝達の成否は、むしろ認識の不一致の程度だけで決まるわけではない。伝達の成否は、伝達される情報の性質にも左右される。伝達内容をなりたたせる要素が、主観性の強いものであればあるほど、伝達は困難になる。認識の個性的な要素を、それだけ多く参与せしめなければならぬからである。待ち合わせの日時を伝えることよりも、愛情の深さを伝えることのほうが、はるかにむずかしいゆえんである。

ところで、認識の不一致は、当事者同士がおなじ場所に居合わせているばあいよりも、時間・空間をへだてたばあいのほうが、当然より大きくなりがちである。

「離婚したいという一番の動機は?」

「女房、やたらと飲みかけコーラをすすめるんです」

(仮面ライター)

これはある新聞に載っていたコントである。これを読んで、さっぱり訳がわからないという人も多いだろう。じつはこのコント、数年前「毒入りコーラ事件」というのが世間を騒がせていたころの作品なのである。その当時は、この事件はひとびとの共通の了解事項であったから、読者のほとんどだれもが「離婚の動機」を理解することができた。ところがその事件のことが当然の了解事項でなくなった今、作者と読者のあいだの認識の不一致は、伝達上の致命的な破綻を意味するものとなったわけである。

時間・空間のへだたりは、しばしば、物質的および文化的な背景の相違をとともなう。この物質的、文化的な背景の相違は、主体相互の認識に、ときとして超えがたいへだたりをもたらし。たとえ当事者同士がおなじ場所に居合わせなくても、育った社会環境が大きく異なっているようならばあいには、やはり同様の事態が生じる。

——彼女はあんなに美人なのに、まだ独身です。

これは、留学生向けの日本語のテキストのなかの例文である。日本人なら、論理的に筋のとった、省略のない完全な文として理解できる。ところが、外国人の留学生にとっては、これはどうみても不可解で不完全な文としか考えられないという(倉谷直臣氏の談話による)。日本には、女はみな一定の若い年代のうちに結婚するべきであり、よほどのブスカなにかでないかぎり、適齢期をすぎるころまでには適当な相手を見つけて結婚するのが当然である、という共通の了解事項がある。結婚相手にことかかない美人ならなおのこと、ということになる。この了解事項を内包する認識のなかでは、「美人なのに、まだ独身」という表現は自明の論理性をもつ。ところが、そのような特殊な了解事項のない社会で育った外国人たちにとっては、事情がまるであらう。彼らの頭のなかでは、「美人なのに」と「ま

だ独身」とのあいだに、埋めることのできない大きな断絶がある。その断絶が、この文を非論理的なものにしてしま
うわけである。

4 屈折的コミュニケーション

言語表現は、発話者を離れて、文字もしくは口承によって、時代を超え社会を超える。ところが人間の認識は、つ
ねに相対的かつ流動的であって、時間をも空間をも超えることができない。そこで、時間を超えた言語表現は、受容
者の認識の相対性に応じて、さまざまに意味づけられることにもなる。ときには、言語そのものの変化がこれに拍車
をかける。そうした様子を、ことわざに例をとってみよう。

灯台もとくらし

「灯台」は、ふるくは屋内照明用の灯火台のことを言った。したがって、このことわざは元来、「灯火台のすぐ下
が暗いように、云々」というふうに理解されていた。ところが今では「灯台」の語は、おもに岬などにある灯台のこ
とをさすようになったので、ことわざの理解のしかたもおのずから変わってしまった。さらに「くらし」の語の解釈
も、「暗し」から「暮し」へと変わってきたりしている。そうなるはこのことわざの理解は、ますます原義から離れ
てゆく。

犬も歩けば棒にあたる

このことわざ、もともとは「じっとしておればよいものを、なまじ何かをするものだから災難にあうのだ」といっ
た意味に理解されていたようである。ところが現在では、まったく逆に、「じっとしてなどいないで、ともかくやっ
てみれば、何か良いことにも出会える」といった意味に理解されている。この変転の背景として、ひとびとの人生観

の変化が指摘される。「ひっこんで災を避けようとする人々よりも、進んで幸を得ようとする人々の勢力が、大きくなった」(金子武雄『日本のことわざ』)ことが、ことわざへの意味づけのしかたを逆転させたというわけである。これは時間的(歴史的)な推移によるものであるが、類似の現象が、空間的(地理的)な転移によっても生じる。

Arolling stone gathers no moss.

「転石苔を生ぜず」である。このことわざ、本家のイギリスでは、「しよっちゅう職や家を変えているような者には、金もたまらない(成功しない)」といった否定的な意味で使われる。ところが同じ英語圏のアメリカでは、「優能な人間はつねに動きまわっていて、苔のようなものがつくひまもない」といった肯定的な意味に理解されているようである。この逆転には、イギリス人とアメリカ人の生活意識のちがいが反映していると考えられる。「アメリカでは人間の移動は肯定されている。なるべく動いた方がいいと考えられている。他方のイギリスでは石の上にも三年式に、なるべくなら同じ場所にじっとしているのがよいと考えられる。伝統を重んじるからである」(外山滋比古『ことわざの論理』)。

秋茄子嫁に食わすな

このことわざには、ふるくから、さまざまの意味づけが並行してなされてきた。なぜ秋茄子を嫁に食べさせないか、という理由が問題になる。代表的な解釈としては、秋茄子はたいへんおいしいので嫁などに食べさせてはもったいない、というもの。これは姑の嫁いびりである。また、秋茄子はアクが強くてからだを冷やすから嫁には毒だというもの。このほうは思いやりの精神である。ほかに、俗信にもとづいて、秋茄子は種子が少ないので嫁に食べさせると子種が絶えてしまう、とするもの。あるいは、ネズミのことを「嫁」ともいうので、うまい秋茄子をネズミなんかにか食べられてはたまらない、と解するもの、などがある。こうしてみると、このことわざは、ひとびとの立場や知

識のちがいに即応したかたちで、さまざまに意味づけられていることがわかる。

さて、このような多様な意味づけの様相に、私たちは言語表現の理解ということの本質的な性格をみてとることができる。まさしく、「言語表現の意味は主体の認識によってつくられる」のである。自分で意味をつくって自分で理解するというのが、言語表現の理解のしかたなのである。むしろ通常のコミュニケーションにおいては、発話者の意図に沿う理解のしかたが要求される。情報の正確な伝達が第一義であるからである。発話者の意図どおりの理解であれば正解、そうでなければ誤解もしくは曲解ということになる。しかしこれはあくまでも、通常、という担し書きを必要とする。右にあげたようなことわざにおいて、正解とか誤解などという言いかたがはたして妥当性をもちうるであらうか。

ことわざのばあい、言語表現の利用目的としては、情報の正確な伝達ということよりも、むしろ教訓性や機知性の発動といった面に重点がおかれる。したがってことわざにおいては、ひとびとの認識にいかによくマッチし、いかに面白いものであるか、ということが第一義的な問題となる。ひとびとの認識によくマッチし面白くさえあれば、原作者の意図とちがった解釈であってもいっこうにかまわないのである。このようなばあいに、正解とか誤解などといったみたところで、およそ無意味というほかはないだろう。「秋茄子」のことわざのように、原作者の意図もわからなくなってしまうものについては、なおのことである。ことわざの意味の基準は、原作者の側にあるのではなく、むしろ利用者の側にあるというべきであらう。

情報の正確な伝達を第一義とする通常のコミュニケーションにたいして、ことわざの表現と理解にみられるような言語活動のかたちを、とくに「屈折的コミュニケーション」とよぶことができる。通常のコミュニケーションにおいては、情報ができるだけ同一性を保って伝えられるようなかたちで、表現および理解の活動がおこなわれる。そこで

は、言語活動は表現主体の意図に従属する。これにたいして、屈折的コミュニケーションにおいては、言語表現そのものの表現構造が効果的に生かされるようなかたちで、理解活動がおこなわれる。ここでは、言語表現は理解する主体の認識に従属する。言語表現の理解の要点は、前者においては、表現主体の意図に合致することであり、後者においては、理解する主体の認識に適合することである。